

風疹ワクチンの歴史

	26歳以下	26歳～ 34歳	34歳～ 51歳	51歳以上
女性	接種率高い	接種率低い 「空白の世代」	中学生の時1回	接種制度なし
男性	接種率高い	接種率低い	接種制度なし	接種制度なし

1987年生まれ

昨年から今年にかけて全国的に「風疹」が大流行しています。新聞やテレビなどマスコミでも特集を組んで注意を喚起しています。今年は患者数が5000人を超え、去年の同じ時期の約38倍というすさまじい勢いで増え続けています。

そして「**先天性風疹症候群**」児が10人生まれているようです。(5月9日現在)

「**先天性風疹症候群**」とは、母親が妊娠時に「風疹」に罹った時、障害をもった赤ちゃんが生まれることを言います。**①先天性心臓病 ②白内障 ③難聴**が有名ですが**難聴が最も多い頻度**です。

1964年米国で2万人もの「**先天性風疹症候群**」児が生まれました。翌1965年米国占領下の琉球(沖縄)でも風疹が流行して408人の「先天性風疹症候群」児が生まれています。中学生になった1978年には「北城聾(ろう)学校」が高校を卒業するまでの6年間の期限付きで開校されています。1982年、後に本や映画の「**遥かなる甲子園**」(1990年)にもなった野球部のことで有名です。

これから沖縄にも徐々に風疹が流行する気配があります。特に20代から40代の男女とも風疹ワクチンを打って少しでも流行を阻止する必要があると思います。

認識しておきたい事は、いったん器官が完成した以後(妊娠約7ヶ月)の感染では障害は起きません。また、妊娠初期にワクチンを誤って接種したとしても、各国の合計800例の報告では「先天性風疹症候群」が生じた例はないという事です。

風疹流行期に風疹によると思われる人工および自然流産数は、1973年～1998年の25年間で合計約25,000例と推計されています。ほぼ同時期に出生した「先天性風疹症候群」児419人の約60倍にも上ります。

妊婦が感染した場合、胎児への感染に至るのは約30%、また感染したと診断された胎児が「先天性風疹症候群」になるのはその30%にすぎません。それらの確率を考慮して妊娠を続行するのかどうか、悩みは尽きません。

悩む状況を解消するにはやはりワクチンでの予防しかありません。妊婦を守るためにも20代から40代の方は是非ワクチンを打ってもらいたいものです。

(たまなは)

(「風疹」加藤茂孝著、モダンメディア2010を参考)